

春告草

第131号 平成31年1月30日 進路指導部発行

センター試験を振り返る（第1回）

平成最後のセンター試験が終わった。現行課程になり5年目、新テスト移行まであと1回となる、最後から二番目のセンター試験だった。大学入試センターからは、中間集計が発表された。平均点や得点分布などをみながら、6年生には個別試験への出願に向けて、5年生、4年生には次年度以降のセンター受験、新テスト受験に向けての資料を提供してみたい。

主要科目では14科目で平均点がダウン(中間集計)

大学入試センターから発表された中間集計のデータ数は約54万人で、全志願者57万7千人の9割強にあたる。右表に地歴A科目や英語以外の外国語などを除く主要科目の平均点と本校6年生の平均点を掲載した。昨年は「20科目中14科目で平均点がアップ」の見出しを付けたが、今年は反対に14科目で平均点がダウンした。全体の概要および確定平均点は明後日2月1日に発表される予定だが、中間発表と大きな誤差はないだろう。教科別の状況をみていこう。

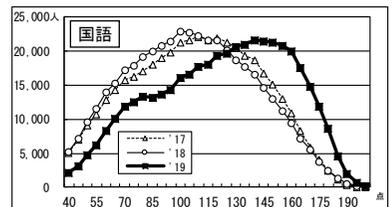
※平均点の評価はセンター発表の中間集計と昨年データとの比較で、集計数は約54万件である。国語下段の数値は、現代文・古文・漢文すべてを解答した生徒の平均点である。
分布グラフは自己採点データ約45万件に基づいて作成されたもので、志願者数の約79%にあたる(データ提供:ベネッセ駿台)。

平成31年度センター試験平均点等一覧

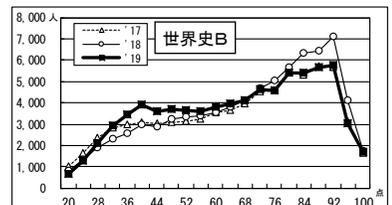
教科グループ	科目	配点	平均点		平均点(昨年度)
			本校	全国	
国語	国語	200	114.1	121.55	104.68
地理歴史	世界史B	100	65.3	65.37	67.97
	日本史B	100	63.8	63.54	62.19
	地理B	100	62.1	62.03	67.99
公民	現代社会	100	57.1	56.77	58.22
	倫理	100	62.2	62.26	67.78
	政治・経済	100	56.8	56.24	56.39
	倫理、政経	100	64.2	64.22	73.08
数学①	数学Ⅰ数学A	100	59.3	59.69	61.91
数学②	数学Ⅱ数学B	100	51.8	53.25	51.07
理科①	物理基礎	50	30.9	30.59	31.32
	化学基礎	50	31.0	31.22	30.42
	生物基礎	50	30.0	30.99	35.62
	地学基礎	50	29.6	29.63	34.13
理科②	物理	100	62.1	56.97	62.42
	化学	100	60.8	54.69	60.57
	生物	100	61.4	62.90	61.36
	地学	100	48.5	46.83	48.58
外国語	英語	200	123.9	123.31	123.75
	リスニング	50	31.6	31.43	22.67

平成31年1月25日大学入試センター発表

国語 一昨年は前年より平均点が20点(200点満点、100点換算で11点)以上もダウンし、「国語ショック」と評価されたが、昨年も4.6点(2.3点)ダウンし、2年続きで平均点が下がった。今年は17点アップし、今年は簡単だったと感想を述べた生徒もいたが、国語ショック以前の水準ではない。分布状況は右図に示す通りで、135点以上の得点層で人数が増加している。国語が高得点と喜んだ6年生は多かったが、もっと点がとれた受験者も多かった。



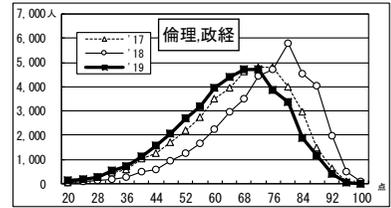
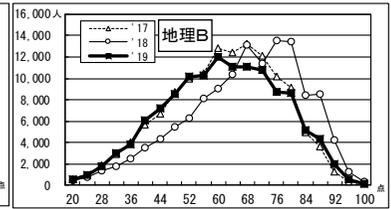
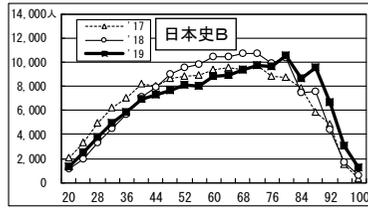
地理歴史 世界史、地理がダウンし、日本史がアップしたが、3科目の平均点差は3点程度とバランスよく収まっている。例年3科目とも平均点は7割に近く、本校生徒の平均点も高い。世界史は90点近辺にピークがあり、これは例年通りの分布状況である。5年生、4年生で世界史を受験しようという人は、90%以上を目指さなければいけない。



公民 4科目すべてがダウンした。倫理は昨年の13点ダウンに続き、今年も5.5点のダウンである。

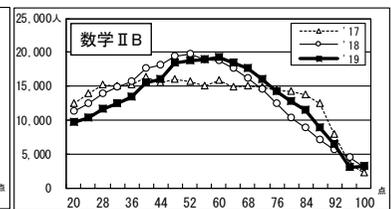
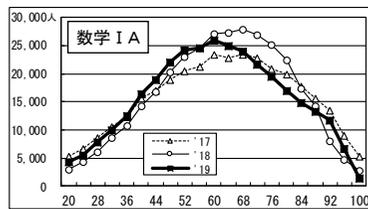
現代社会は倫理と政治経済の問題から構成されていて、一般的には負担が少ない科目と評価され受験生も多いが、得点分布は広がる傾向が強い。

「倫理、政経」は76点以上88点以下の得点層の人数が減少して、8点以上の大幅ダウンとなった。それでも教科内では最も高い平均点である。（「倫理、政経」以外の分布グラフは省略した。）



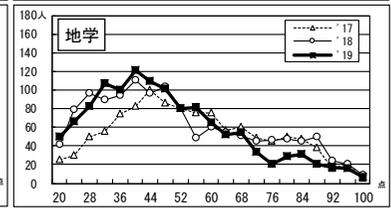
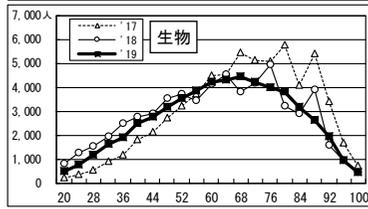
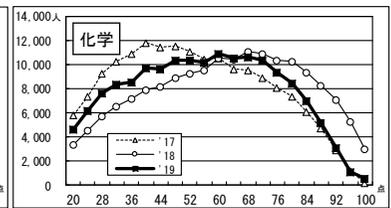
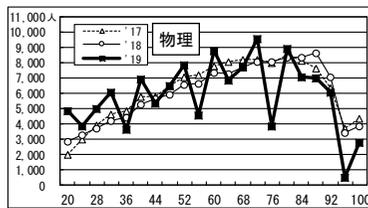
数学 数ⅠAは2年続けて平均点がアップしたが、今年は2.22点のダウンである。分布をみると76点から84点の得点層が減り、85点近辺より上位が増加した。得点差が明確になった感があり、数ⅠA9割突破は難関大志望者の必須課題である。

数ⅡBは2.18点アップした。数ⅠAに比べて計算負担が増す傾向にあるが多少緩和され、数ⅠAとの得点差は6点に縮まった。4年前39点という厳しい年もあったが、50点台の平均点は好ましい傾向だ。



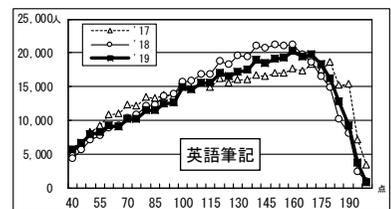
理科 基礎科目の理科①では、化学基礎がアップしたが、残り3科目はダウンした。理科①は国公立大文系志望者の多くが受験する科目で、化学基礎と生物基礎の2科目受験者が圧倒的多数を占める。昨年、教科内の平均点差は10点(100点満点換算)だったが、今年は3点に縮まった。（基礎科目の分布グラフは省略した。）

理科②は主に理系志望者が受験するが、文系でも大学によっては基礎2科目に変えて理科②1科目で受験可能などもある。地学は極端に平均点が低いが、これは受験生に文系志望者が含まれていると思われる。受験者数も少ない。地学以外の3科目については、物理、化学がダウンし、生物がアップした。生物は現行課程になって毎年5点以上の幅で平均点が大きくアップダウンしていたが、今年は1.54点と小幅のアップである。一方、3科目の平均点差は昨年2点未満だったが、今年は8点差に広がった。化学は76点以上の得点層で人数が減少している。



英語 例年受験者が最も多い英語筆記は0.44点(200点満点)ダウンとなった。分布は図の通りで、160点あたりにピークがあるが、これ以下の人数は減少している。センター英語は8割はマークしたいところだ。

昨年、過去最低となったリスニングは8.76点(50点満点)アップした。一昨年と比較しても上位層が厚くなった。新テストに向けて「英語リスニングは難化の傾向」と昨年評価したが、的外れだったようだ。



(リスニングの分布グラフは省略した。)

主要14科目で平均点ダウンも総合では、文系理系とも平均点アップ

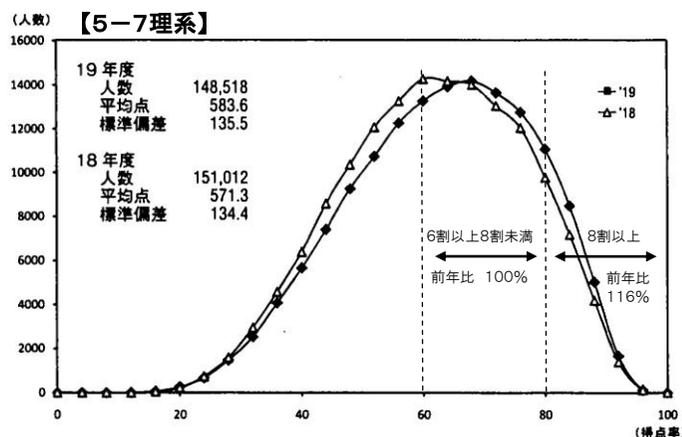
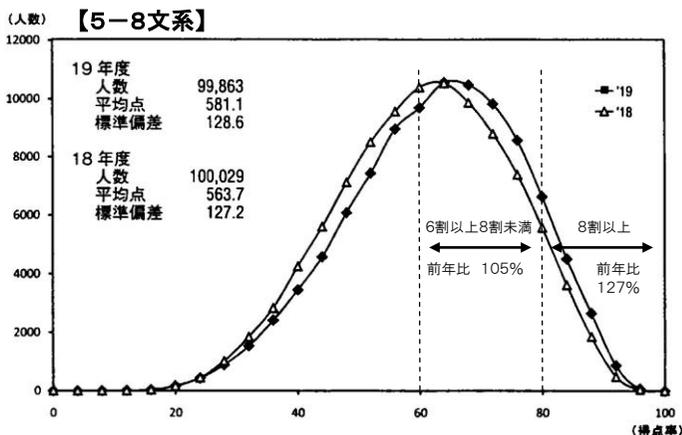
科目別では14科目で平均点のダウンが見られたが、国公立大受験型の総合得点(文系5教科8科目集計、理系5教科7科目集計)では平均点アップが見込まれる。国語の平均点アップによるところが大きい。

タイプ別の分布グラフは右図で、文系、理系とも8割以上の得点層で人数の増加がみられる。

予想平均点(ベネッセ駿台)は5-8文系で570点(対前年+16点)、5-7理系で576点(対前年+12点)である。

一般的に平均点が上がると、難関大に積極的にチャレンジする傾向がみられるが、今年も国立難関大を中心に強気の出願が予想される。データリサーチをみても対前年の志望者指数で100を上回る大学・学部が目立つ。

一方、私立大センター利用入試は全体では志望者指数が減少している。入学定員の厳格化が影響し、受験生が出願数を絞り込んでいるためだろう。ただし、難関私大敬遠の影響で、中堅大で激増の大学・学部もある。3教科型の集計では平均点が、文系型(英・国・数or地歴公民型)で+16.7点、理系型(英・数・理型)で-4.1点である。志願者は減っても、平均点のアップと入学定員の厳格化で、合格ラインの引き上げが見込まれる大学が多いようだ。



大学入試ガイド(4)

新テストで求められる学力とは？

「センター試験」も残すところあと1回となった。2021年度入試(現4学年受験年度)からは新テスト「大学入学共通テスト」が実施される。大学入学段階で「知識の理解の質」と「思考力・判断力・表現力」をしっかりと問うことを目的とした入試改革が進められているが、この流れに合わせるように、センター試験を始め各大学の入学試験も変化を遂げている。

また、新テスト実施に向けて昨年度より試行調査が行われていて、高校生、大学生を対象に新テストの模擬テスト(試行テスト)が実施され、出題形式や問題レベル、問題量はもちろんのこと、自己採点についてもシミュレーションが行われた。

今年のセンター試験を振り返り、4年生はもちろん5年生も大学が求めている学力を着実につけていくためには、今何をすればよいのかを考えていこう。(新テストに関する記述に関しては、試行調査段階でのコメントである。確定した内容でないこともあるので、情報は大学入試センターホームページなどで今後、確認する必要がある。)

グラフや図表を読み解く力

新テストの典型的な出題は、グラフや図表が多いことだ。地歴・公民や理科は科目の特性上、図表が多くなる傾向は否めないが、今年のセンター試験でも対話形式での出題、文章・図表など複数の素材の読み取りから考察する出題がみられた。

●英語 英語(筆記)では、実践的なコミュニケーション能力を問う傾向が続くほか、グラフ・イラストや表から情報を読み取らせる問題が出題された。

新テスト情報 新テストでは、試験名が「筆記」から「筆記（リーディング）」と改められる。これまで出題されていた発音・アクセント・語句整序の問題はなくなり、読解に特化した試験になる。試行テスト「筆記（リーディング）」の設問はすべて英語で、語彙数も約1000語増えた。語彙レベルは平易だが、英文の内容を「大づかみする力」が求められている。すなわち、全体を広く読んで論旨を把握する学力が求められている。

また、英語（リスニング）の試行テストでは、読み上げが1回の問題もあり一度で聞き取る力も必要となる。

配点に関してもこれまでは、筆記200点、リスニング50点だったが、新テストでは各100点（試験時間は現在と変わらず、筆記（リーディング）80分、リスニング30分）となり、リスニング力がより重視される。

●理 科 実験・観察に基づいて考察する問題が目立つ

●日本史B 会話形式の出題が継続（大学の歴史サークルの先輩・後輩の会話）

●地理B さまざまな図表を用いて、読み取りと基本的な知識を結びつけて解答させる問題が出題された

新テストに向けて 今年のセンター試験・地理Bは全34ページ中33ページに図や表が掲載されている。科目の特性上、仕方ない面もあるが、新テストでは、地歴以外の教科・科目でもグラフや図表が多く登場し、複数の資料から情報を読み解かせる問題が多く出題される。試行テストを受験した生徒は、「問題を解くのに必要な知識は同じなのに、答えにたどり着くまでに時間を費やす構造になっている。まどろっこしかった。」と感想を述べた。

試行テスト世界史Bでも「グラフから時期を読み取り、関連する出来事を思い浮かべ、それに関連する国を地図から選ぶ」という複合的な問題が出題された。解答にたどり着くまでに、何段階かステップが必要となり、小手先のテクニックでは通用しない内容だ。

問題が長文化する中、求められるのは読解力

今年のセンター試験・数学I Aの問題冊子のページ数は20ページだったが、試行テストでは27ページに上った。数学の試行テストでは、問題文に会話文が登場するなど、各問題が長文化している。これまでの問題形式になれた人にとって、「まどろっこしい」と感じるのは当然だろう。数学に限らず問題文が長くなる傾向が認められる。

新テスト情報 会話文形式の出題は今年のセンター試験・日本史Bでも出題された。数学の問題で会話形式の出題といえば適性検査を思い出すが、会話文を通して新たな課題が提示されるので、状況や設定を読み取る読解力が試される。試行テストの古文・漢文でも、教師と生徒の会話、生徒同士のディスカッションといった場面の設定があった。また、「詩」や「エッセイ」も試行テストで出題された。多様なタイプの文章に触れ、その趣旨を理解できる力が必要がある。

求められる記述力

新テスト情報 マークオンリーだった出題形式に記述式問題が導入される。国語と数学でまず導入されるが、将来的には、地歴・公民、理科にも導入されていく。国語では、20～30字程度、40～50字程度、80～120字程度を記述する問題が各1問出題される。記述問題は点数ではなく3～5段階で評価され、試験結果を受け取る大学側で独自に得点化する。配点は「200点＋記述問題の評価」である。解答時間も現行のセンター試験の80分から100分に延長される。

数学Iでは、「数式を記述する問題、または問題解決のための方略等を端的な短い文で記述する問題」が3問出題される。空欄にあてはまる数・文字をマークするのではなく、適切な数式や等式などを自由に記述する方式である。解答時間も10分延長され70分となる。

結論よりも途中経過を大切に学習を確立する

まず、理系の生徒でも読解力が、文系の生徒でもグラフや図表を読み解く力が要求される。また、マーク式問題も選択肢が1つではなく、正しいものをすべて選ぶ方式も導入される。問題①で1を選んだら問題②の正答はA、2を選んだら正答はBというように解答も複雑化する。こういった出題に対応するためには、用語の暗記ではなく、結論よりも途中経過を大事にする学びを実践することだ。平易な知識でも、これを丁寧に学習した生徒が試行テストでも得点できているという情報がある。